

自著と  
その周辺

## 臨床検査法提要 改訂第33版

監修 金井正光  
編集 奥村伸生, 戸塚 実, 矢富 裕

金原出版  
1,896頁  
2010年  
定価 15,750円

臨床検査法提要の第1版は昭和16年(1941年)6月に当時の金原書店(現在の金原出版)から出版されました。改訂第32版編者金井正光信州大学名誉教授の序によれば、原著者金井 泉博士(金井正光名誉教授のご尊父)によって記された発刊の経緯が次のように引用されています。“昭和10年頃は臨床検査を専攻するような学者はきわめて少なく、また臨床検査全般にわたり、機能検査も含めてまとめた成書は見当たらなかった。したがって患者診療にあたって、適正な検査法に通暁していくことは、新入医局員や実地医家にとって容易な業ではなかった。著者はこのことを痛感し、各種の検査法を比較実験し、良法を整理して一見実施しやすいように摘録収集し、昭和8年以来、これらのメモをプリントし「生物学的臨床検査診断法」として海軍軍医学校の経典として使用してきたが、昭和16年金原書店から懇望され「臨床検査法提要」として公にした。”

それ以来、日本全国の多く著名な先生方や信州大学の各分野のご専門の先生のご協力のもとに金井 泉・金井正光両先生の努力によって、常に最新の試薬・項目・検査法を取捨選択し、古い検査法を整理し、60年以上にわたって版を重ね、第32版(1894頁)が出版されたのが平成17年(2005年)でした。長年にわたって「臨床検査のバイブル」と言われ、臨床検査を自ら行ったかつての医師、現在臨床検査をもっぱら行う臨床検査技師、臨床検査技師を目指す学生に利用されてきました。現在では精度管理された測定値が診察前に得られる時代を迎えたために、「検査値の読み方」的な書籍が多く発行されている中で、金井 泉先生の原著発刊の経緯にあるように、適正な検査法を一見実施しやすいように要点をかいつまんで述べる(すなわち提要)することを貫いて編集されてきました。

平成20年春、金井正光先生から私奥村と戸塚 実(東京医科歯科大学大学院教授)・矢富 裕(東京大学大学院教授)の3名が第33版改訂の編集作業を依頼されました。コンセプトを以下の4点として編集をお引き受けいたしました。①臨床検査技師養成校の臨地実習に本書1冊で対応可能とすること。②最新の臨床検査項目を取り入れ、臨床検査技師の卒後教育に活用可能とすること。③測定値の診断的意義だけでなく、測定法の詳細と分析上の誤差要因を解説すること。④画像検査・生理検査についても基礎から臨床までを網羅し、医師・臨床検査技師以外の医療従事者にも役立つ解説と写真を掲載すること。全部で20章にわたる大著あり全面大改訂はできませんでしたが、主に次のような観点で改訂を行いました。①臨床血液検査(4章)、体液・電解質・酸塩基平衡検査(7章)、内分泌代謝機能検査(8章)、染色体・遺伝子検査(13章)、腎機能検査(16章)を刷新。②超音波・CT・MRIなどの画像検査と症例写真を充実(1・15章)。③臨床化学検査(6章)にビタミン・薬物濃度・毒物検査を追加。④輸血・移植免疫検査(10章)に血液製剤管理を追加。⑤POCTを含め最新の検査項目を追加(2・12・17章)。さらに、読者の便宜を図るために索引を充実させるとともに、本書内で使用された基準範囲と略語を巻末の基準範囲一覧(22頁)と略語表(40頁)に集約しました。持ち運びのことも考慮し第32版より頁数が増加しないようにしたため、新たな試みとして第33版で掲載できなかった事項や削除した古い検査法などを金原出版ホームページから閲覧可能としました。

本書第33版の著者数は135名ですが、内65名が信州大学在職中または信州大学にかつて在職しておられた先生方であり、信州大学を中心にして上梓された本と言って過言ではありません。お忙しい中を御執筆いただいた著者の先生方に心より感謝申し上げます。本改訂版が臨床検査に携わる多くの臨床検査技師あるいは医師に幅広くかつ的確に利用され、それが医学・医療の発展に寄与し、さらに患者さんの正確で迅速な診断に還元されQOLが向上する一助となることを切望しています。最後に、より良い次期改訂のために本書に対する忌憚のない意見を頂ければ幸いです。

(信州大学医学部保健学科病因・病態検査学講座 奥村 伸生)

